



## 夏休み明けを迎えて

さて、夏休みが明けて9月がスタートしました。この休み中には、大きな事故や事件に巻き込まれる生徒はいなかったと聞いています。これは、皆さんの自覚と、ご家族の協力、地域の方々の温かい目、そして先生方の指導の賜物ではなかったかと思います。

この40日の夏休み中に、各地域で夏祭りが開催されていましたが、とても嬉しかったことがあります。それは、各祭礼に出向いた際に、四中生がボランティアとして地元自治会のお手伝いをしていた姿を見ることができたことです。

皆さんも地域の一員として、また将来、この地域の後継者としてお手伝いにあたることは、とても大事なことです。各自治会の役員の方々から、沢山お礼をお伺いしました。これからも、地元を大切にする気持ちを持ち続けてもらいたいと思います。

## ボランティアの流儀

さて、ボランティアといえば、8月12日から行方不明になっていた山口県の2歳の男の子。祖父らと海水浴に向かう途中、一人だけで家に引き返す際に行方が分からなくなりました。県警などが150人態勢で捜索を継続している中、大分県在住の「尾島春夫さん」が14日に行方不明になった周防大島町に入り、家族から状況を聞き取った後、15日県警の捜索隊に先駆けて午前6時ごろから単身でボランティアとして捜索に加わりました。すると、約30分後に行方不明になっていた2歳の男の子を発見し、無事保護することができました。

この「尾島春夫さん」は、赤い作業着がトレードマークで、各地の行方不明者の捜索や、全国の被災地で長年ボランティアを続けてきた経験を持っています。インタビューでは、「人の命より重いものはない。貴い命が助かってよかった」と語っています。

尾島さんは、ボランティア活動に参加する際は、必ず軽ワゴン車に食料や水、寝袋などの生活用具を積み込んで出勤し、助ける相手側に負担をかけないのが信条だそうです。活動費も自分の年金から捻出しています。15日に2歳の男の子を発見した日も、2歳の男の子の祖父から風呂を勧められましたが、尾島さんは「そういうものはもらえない」と断りました。また、尾島さんは、「何事も、対岸の火事だとは思わずに行動できる人が、もっと増えてほしい」とも語っています。何はともあれ、男の子が無事に発見されて良かったと感じたのは、皆さんも同様ではないでしょうか。



## 金農旋風 全力校歌

今年の全国高校野球選手権大会は、第100回目を迎え記念大会として開催されました。全国都道府県（地区）から勝ち上がった56校が、全国3781校の頂点を目指して熱戦を繰り広げました。

この中で特に注目を浴びたのは、決勝に進出した北大阪地区代表の大阪桐蔭高校と、秋田県代表の金足農業高校でした。大阪桐蔭高校は、史上初となる2度の春夏連覇に挑む強豪校で、甲子園の常連校です。一方の金足農業高校は、公立高校でほぼ地元出身の選手で構成されており、秋田県勢として第1回大会以来103年ぶりの決勝進出を決めたことで注目を集めました。

この2校のみならず、すべての出場校は各地区を一度も負けずに甲子園まで勝ち上がり、負けたことが無い学校同士が対戦し、勝敗を競うところに醍醐味を感じます。

それでは、ここで問題です。甲子園に出場した56校に必要な試合数は何試合でしょうか？引き分け、再試合が無い場合で考えてください。（答えは下段に）

結果は、大阪桐蔭高校が史上初となる2度の春夏連覇を成し遂げ、新たな記録を打ち立て幕を閉じました。

ここで注目してみたいのは、負けた金足農業高校です。皆さんもテレビ画面で見た人も多かったかと思いますが、各対戦が終了すると勝利した学校の校歌が演奏されます。その際、金足農業高校の生徒は、格調高い歌詞とメロディをのけ反って「全力校歌」で歌い上げる姿です。

試合後、18人が背中を後ろに何度も反って全力で校歌を歌う姿は、今大会の注目を集めました。

金足農業高校では、昨年夏の秋田大会から「やるなら何でも全力でやろう」を合言葉に導入したとのことです。この姿に、感動を覚えたのは私一人でしょうか？また、金足農業高校のピッチャーで、決勝こそ途中交代しましたが準決勝まで一人で投げきったエースの「吉田輝星」投手は、「疲れているけど、伝統なんで」と答えています。

こんな姿を自分の学校にも見ることができたら、思わず涙するに違いありません。

自分の学校の校歌を伝統として、後世に引き継いでいくことこそ、今もこれからの時代にも求められている伝統の継承ではないでしょうか。校歌は、皆さんが卒業しても決して忘れることのない思い出の1ページです。

（答え）55試合です。

※56校のうち、優勝したチーム以外の55校が負けるために必要な試合数は55試合ですね。

